

特集2 障がい者雇用

障がい者ととともに働く

世の中には、健常者もいれば、障がい者もいます。

だから、私たちの職場もそうあるべきだと考えています。日本のユニクロでは、1店舗に一人を目標に障がい者を雇用し、約9割の店舗で活躍しています。

私たちは考えます。

必要なのは、違いを受け入れること。

必要なのは、お互いを認め合うことだと。

沖縄県 ユニクロ イオン那覇店
上原里恵子／文・田口ランディ —— 10

大阪府 ユニクロ 中もず店
山田哲功 —— 13

山口県 ユニクロ 宇部清水川店
三浦智恵子 —— 14

東京都 ユニクロ 浅草ROX店
鈴木郷 —— 15



Special Essay

01 そのままのあなたが、好きです 文・田口ランディ

全国の店舗に広がりつつあるユニクロの障がい者雇用。日本の企業のなかでも圧倒的な雇用数を誇り、福祉の分野からも注目を集めている。作家・田口ランディが、ユニクロの障がい者雇用の原点を探して訪れた沖縄。そこで出会ったものは？

上原さんと初めて出会った日のことは、よく覚えています。

年も違う、趣味も違う、歩いてきた人生もまるで違うのに、なぜか彼女が気になりました。

彼女は耳が不自由でした。みんなの声が聞こえません。

でも生きることに懸命で、働くことが大好きで、ちょっとやそっとの苦労なら笑い飛ばして生きている。

そんな彼女の姿に、私は魅かれたのです。私にも生きる悩みがありました。

障がい者と健常者。だけど、わかちあいたいと願いました。

みんな違うのだから、あなたはあなたのままでいい。いっしょに助け合って生きていけたら……。

一人ではできないことが、二人でならできました。

まるで夢みたいだけれど、本当のお話です。

たくちらんてい
田口ランディさん

作家。2000年に長編小説『コンセント』（新潮文庫）を発表し、執筆活動に入る。その後、広く人間の心の問題をテーマにした作品を発表。近刊に『生きなおすのにもってこいの日』（バジリコ）がある



障がいのつらさはわからないけれど、 生きることのつらさはわかりあえる



障がいをもった人を雇用します。会社から「障がい者雇用のマニュアル」を渡された儀間十里さんは、その内容を読んでびっくりしたそうです。マニュアルに書かれてあったのは形式的な文章ばかり。なんの指針もなく、障がい者を職場に丸投げするようなものでした。儀間さんは「これはなにか違うなあ」と思ったそうです。

初めての障がい者雇用で入店してきたのは、聴覚障がいをもつ上原里恵子さんでした。その上原さんの職場での相談役となったのが儀間さんでした。緊張のあまりおどおどしている上

原さん。なるべく自分を前に出さないように、いつもミシンに向かって黙々と補正の仕事を続ける上原さんの背中を、儀間さんはとてもせつない気持ちで見守っていました。このままでは上原さんは同じ職場で働く仲間になれない。もっと、自分を表現していかなければ、みんなとうちとけられない。儀間さんはそう思ったのです。

「上原さん、もっと人前に出ようよ。」そう呼びかける儀間さんに、上原さんはとまどいます。なぜならユニクロは上原さんにとって、四十歳にして初めての職場だったからです。この時期、



うえはら りえこ
上原里恵子
聴覚障がい
沖縄県 ユニクロ イオン那覇店

「最初はお客様が恐かった。でも儀間さんが『大丈夫、大丈夫』と何回も言ってくれて」



きま としと
儀間十里
沖縄県 ユニクロ はにんす宜野湾店

「上原さんに『できない』と言われて、真剣にケンカをしたこともあります」

上原さんは家庭の事情のためにどうしても働くことが必要でした。こんなご時世に障がいのある自分を雇ってくれるだけでもありがたい、そういう気持ちでした。もし、お客様の前に出て失敗したりしたら、と想像するだけで怖くなり、自分には健常者のスタッフと同じように働くなんで無理だと思いこんでいました。

上原さんのけなげな気持ちが、儀間さんには痛いほどわかりました。寡黙にミシンに向かう背中を見ているうちに、だんだん儀間さんの考えが変わりました。「上原さんがどんなにがんばっても障がいを消すことはできない、ならば健常者の自分が変わらなければ」。儀間さんは、手話を覚えようと決めました。手話を覚えて上原さんと会話ができるようになれば、上原さんももっと自分の気持ちを表現できるはず。休み時間に上原さんから手話を習い、朝礼で一日一つ、スタッフに紹介していきました。

職場のみんなが手話を練習する、そのことがどれほど上原さんの励みになったことか。私は受入れられている。上原さんは職場の仲間たちから、人前に入る勇気をもらったのです。

どうしても引け目を感じてしまう上原さん。そんな上原さんを支えてきたのは、儀間さんの「ぜったいに上原さんといっしょに働くんだけ」という強い熱意でした。小さい時にお父さんを亡くし、がんばりやお母さんに育てられた儀間さんの心には強く「人と人は助けあって生きるもの」という思いが刻まれていたのです。

だんだんとお互いのことを語りあうようになり、儀間さんと上原さんはそれぞれの人生を知ります。みんないろんな苦悩を生きている。障がいのつらさはわからないけれど、生きることのつらさはわかりあえる。みんな違う。けどどこか同じ。それが人間というものなんだ。

儀間さんと上原さんのつながりが、

次第に他のスタッフにも伝わっていききました。考えてもわからない、でも、いっしょに働いていけば身体でわかることがある、それが人間関係。いつしかみんなが手話を覚え、上原さんも「私は聴こえません」と、自分の障がいをお客様に表現することができるようになりました。そうなったとき、職場は共に生きる場になっていました。

「障がいがあると言えないことが一番つらいね」と上原さんは言います。障がいも自分自身の大切な一部だから。

沖縄で障がい者雇用が成功している、この情報は沖縄から全国の店舗へと伝わりました。そして社内の「障がい者雇用」のあり方が見直され、制度が変わっていききました。二人の人間の出会い、それが会社を変えてしまったのです。上原さんは今年勤続15年になります。儀間さんとはいまでも大親友です。

初めに人間ありき。それがユニクロの障がい者雇用の原点でした。

上原さんと会話をするため、儀間さんは朝礼のときに一日一つ、みんなで手話を覚えることを提案した



「障がいがあると言えないことが一番つらいね」(上原さん)



上原さんと儀間さんの手話でのおしゃべりは、とても「にぎやか」。手話はわからなくても、楽しい話をしてるのが、見ていてわかる

02

今日も1日、やったるでえ

やまだ てつよし
山田哲功
四肢障がい
大阪府 ユニクロ 中もず店

山田さんの朝は早い。そして速い。毎朝自転車で、結構なスピードを出して、誰よりも先に出勤する。山田さんが入社して12年。住宅街をびゅーっと走り抜け爽やかに通勤する姿も、この辺りではおなじみの朝の風景だ。

以前は、自転車の製造工場にいたが、接客がやりたくてユニクロに転職した。でも入社してすぐ、山田さんが直面したのは「遠慮の壁」だった。スタッフと話していても、相手との間に壁がある。(どう接したらいいんだろう?) 声には出さなくても、相手のとまどいが伝わってくる。仕事は覚えればいい。でも、相手とわかり合うのに、特効薬はない。その都度、対応していくことの繰り返しだ。

「特別なことではないけれど、もともと人と話すのは好きだから。休憩時間とか、自分からも話しかけるようにしましたね。」

入社当時のこうした日々を、山田

さんは今でも鮮明に覚えているという。「遠慮の壁」が少しずつ低くなっていったのは、入社後3カ月を過ぎた頃だった。

バックヤード中心の仕事から徐々に接客へ、そして「レジもやりたいです」と、自ら店長に申し出た。

「当時の店長はすごく悩んだみたいですね。今僕が考えても、それはそやな、と。」実際にやってみてどうだったのだろうか。

「めっちゃ怒られました(笑)。でもうれしかったですよ。ユニクロは『どこまでできるんやろう』って、まずは試してくれる。当然、合格・不合格はあるけれど、自分自身が認められている、という実感があるんです。」

レジは、接客の一番の場である



にも、お金を扱うため、お客様のチェックも当然厳しくなる。山田さんはレジを打ちながらお客様の様子について、ある統計をとったという。

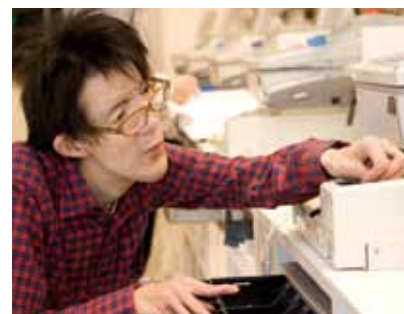
「僕がレジを打ったあと、何人の人が、レシートの内容を確認するんやろうって。」

結果、10人中8人がレシートを確認していた。不安そうにレシートを見直すお客様の背中を、山田さんは何人も見送った。

仕事をしていれば誰でも、くやしい経験、しんどいことが当然ある。でも、そうした経験の全部を通じて、山田さん自身も変わっていった。「レジや接客をすることで、『人から見られている』ことを、自分で認めざるを得なくなった」のだという。

「以前は、世の中は矛盾していると思っていました。ひねくれ者でした。でも今は、じゃあどうやって、この世の中をくつがえしていこうかって。ね、今のかつこいいでしょ?(笑)」

snapshot 山田さんの仕事いろいろ



8:30 レジ開け。各レジにおつり用のお金を仕分ける



9:00 段ボールから商品を出し、色・サイズ別にハンガーに吊す。ハンガーをラックにかけ店頭並べる

03

おしゃれな
三浦さんのこと

みうら ちえこ
三浦智恵子 (写真・左)
知的発達障がい
山口県 ユニクロ 宇部清水川店

じんのようこ
神野洋子さん (写真・右)
光栄会障害者就業・生活支援センター
就業支援担当者



「『ユニクロ』という会社の話を聞いたんですけど…。接客もあるみたいだし、やめておこうかなと思って。」

前職を辞めて、次の仕事を探していた三浦さん。そんな彼女から、光栄会障害者就業・生活支援センターの神野さんのところにかかってきたその日の電話は、いつもと少し違った。人一倍「働くこと」に熱意を持っている三浦さんとは思えない、ちょっと気乗りのしない声。でも、ちょっと待って。神野さんは直感する。

「ユニクロって、三浦さんに合っている！」

神野さんが三浦さんと初めて会ったのは、三浦さんが前職を辞めた直後のこと。障がい者雇用を支援する地域の

ネットワークには、ハローワークや障がい職業センターなどもあるが、神野さんが所属する障害者就業・生活支援センターは、仕事だけでなく生活支援も行うという点で他とは異なる。三浦さんにとって、一番身近な相談相手が神野さんだ。

三浦さんは就職活動にすごく積極的だった。ただユニクロに対しては、それほど熱意やリアリティを感じていなかった。というのも、三浦さんの前職は加工食品の工場。社外の人との交流はなく、仕事内容も同じ作業の繰り返し。毎日いろんなお客様が来店するユニクロとは、全く異なる環境だ。三浦さんが尻込みするのも無理はない。でも、神野さんの想いは違った。

「一番は、おしゃれが好きなんだから(笑)。好きなことなら、より前向きに仕事ができる。それに環境は変わりますが、前職で長く働いていた経験から、基本的な労働習慣や職場のマナーは完璧。ユニクロの仕事はむしろ合っていると思ったんです。」

神野さんは、一緒に就職活動を進める中で、しっかり見つけていた。三浦さんの能力だけではなく、人柄や好きなこと、そして、働くことへの想いのようなもの。

「だって、仕事が無くて『気が滅入る』という話をされているときも、おしゃれだけは欠かさなくて(笑)」

神野さんの後押しもあってユニクロに入社した三浦さん。現在は前職以上に生き生きと働いている。店舗へ様子を見に来た神野さんにも「次は、ズボンの裾上げもやってみたい」と、楽しそうに話す。

「夢や目標を持てるようになったのが、すごいと思います。障がいがあったとしてもステップアップしていける、上を目指せる、そういう環境が、三浦さんには良かったんだと思います。」

三浦さん一人だったら、ユニクロでは働いていなかったかもしれない。だけど神野さんが加わることで、三浦さんの夢も可能性も広がった。

snapshot 三浦さんの仕事いろいろ



商品を段ボールから出し、色別、サイズ別に整理をする品出しの作業。袋から出して、サイズを確認して、整理して…。次から次へズミカルにこなし、あっという間にひと箱完了



休憩時間のスタッフルーム。仕事のこと以外にも、お昼ご飯のこと、休日に行った場所のこと、いろんなことを話す。入社する以前の三浦さんからは、想像できない

04

ユニクロにたどり着くまで

すずき 郷
鈴木郷
高次脳機能障がい
東京都 ユニクロ 浅草 ROX 店

すずき まゆみ
母 鈴木真弓さん

鈴木真弓さんの長男、郷さんが事故にあったのは20歳のときだった。奇跡的に一命をとりとめ約1ヵ月後には退院。医者にも「後遺症は無い」と言われ、一見すると事故以前の状態とほぼ変わらないまでに回復した。

でも、家族から見た郷さんは、明らかに以前と違っていった。今話したこともすぐ忘れる、突然キレる、暴れ出す。こうした郷さんの行動が、事故による後遺症（高次脳機能障がい）であると認定されたのは、事故後4年7ヵ月がたった頃だった。

ユニクロへ面接に来たのは、ようやく後遺症の認定があり、社会復帰に向けて歩き始めたばかりの時期。郷さんの状態もまだまだ落ち着いていない。

「面接へは『気がすまない』という本人を、『だまして』連れて行ったんです。入社後も3年くらいは本当に大変でしたね」と真弓さんは当時を振り返る。

通勤も最初は不安が伴った。朝は一

人で通っていたが、帰りは心配で店舗を出るときに携帯にメールを送るように言い、最寄の駅で毎日郷さんの帰りを待っていた。

また、真弓さんも随分後になって知ったそうだが、入社後2年くらいは、昼休憩中、他のスタッフとの雑談には加わらず、昼食後は男子トイレの個室にこもり、休憩時間終了まで出てこなかったという。

「誰かに話しかけられたり雑談をすると、脳が疲れ切ってしまう、午後まで集中力が持たないから」と言うんです。この話を聞いたときはすごくショックでした。でも、失敗を繰り返して自分で痛い思いをしたからこそ、記憶力も少しずつ良くなっていったんだと思います。」

入社当時、郷さんは仕事を覚えるためにメモをとっても、メモした紙を無くしてしまったり、メモしたこと自体



を忘れてしまう状態だった。それが今では、接客もフィッティングも、一通りの作業をこなし、障がいがあるという理由で、できないことはほとんど無い。郷さんの症状は当時からは想像もできないほど回復している。

「高次脳機能障がい」は、郷さんの事故当時はもちろん、今でもまだまだ知られておらず、目に見えない障がいゆえに周りからも理解されにくい。真弓さんは今、高次脳機能障がいをもっと多くの人に理解してもらうために、各地で講演活動を行っている。ご家族が郷さんと手探りで歩いてきた道は、同じ障がいをもつ人の未来への道となり、健常者と障がい者がわかり合うための道として、広がり続けている。

snapshot 鈴木さんのOn time・off time



朝来てメモするのは、その日の予算と前日の売上げ、そして休み時間だけ。難しい商品名も全部覚えている

浅草は地元。ランチタイムはほとんど外へ食べに出る。よく行く寿司屋さんとは友だちになった。行くと「郷、おまえ、いつものでいいの？」と言われるほど



最大の課題は「知らない」ということ

株式会社 福祉ベンチャーパートナーズ
代表取締役 大塚由紀子さん

なぜ、障がいの雇用率は伸びないのか。行政・企業・社会、それぞれに課題はありますが、最大の原因かつ共通して言えるのは「知らないこと」。企業も行政も一般の生活者も、障がい者について無関心で、知らないことが多いのです。現在の日本社会の中では、学校には特別学級があり、健常者と障がいをもった子どもが別々の教育を受けていたり、社会に出てからも「働く障がい者」の姿を見ることが少なく、まして「障がい者から何かサービスを受ける」機会は、非常に限られています。そうした社会の中では、企業や一般の人々が「障がい者と一緒に働く」ことを身近に思えず、「戦力にならない」「働けない」と、一方的に考えてしまうのも、当然なのかもしれません。でも本当にそうなのでしょうか。ユニクロでは、障がい者も「一緒に働く仲間」「貴重な人材」として活躍しています。それができるのは、仕事内容の特性だけ

ではなく、「正しいことを正しく行い企業価値を上げていく」という経営戦略の中に、障がい者雇用も組み込まれており、それを現場の従業員が妥協することなく実行していった結果だと思っています。

障がい者雇用を進めるのに、まず必要なのは、人々に関心を持ってもらうこと。だからユニクロには、自社の取組みを、社内だけで終わらせずに、他企業や社会にも伝えて欲しいと思います。そのためにも、障がいをもったスタッフに、バックヤードだけではなく店頭でもっと活躍して欲しい。「こんなに活躍している人がいる」という事実を、障がい者の家族にも勇気を与えてくれます。社会に障がい者と触れ合う機会が増え、人々が自然に関心を持つようになっていけば、障がい者雇用の現状も、変わっていくと思います。



コンサルティング会社での勤務を経て1999年独立。障がいの自立支援活動を行っていたヤマト運輸元会長の故小倉昌男氏と出会ったことをきっかけに、「福祉と経営の融合を通して障がいの働く場をつくっていきたい」と、2003年、株式会社福祉ベンチャーパートナーズを設立

「チャレンジ」することは楽しい

プロ車いすテニスプレーヤー 国枝慎吾さん

テニスを始めた当初は、テニスという「女の子のスポーツ」というイメージがあったり、その頃はやっていた漫画の影響もあって、バスケットボールの方が好きでしたね。でも高校で海外遠征に行き、そこで初めてプロのプレーを見たんです。技術と気迫に鳥肌が立ちました。「いつか自分もあの場で勝負したい」と思ったのを覚えています。プロになった今、これまで以上に多くの人に車いすテニスを知って欲しいと思っています。そのために大

きな舞台でプレーし、自分が勝ち続けることで注目を集めたい。そして、子どもたちに夢を持ってもらいたいです。障がいをもっている、何にでもチャレンジして欲しい。チャレンジは楽しい。怖いこともあるけれど、やってみないとわからない。勇気を持って踏み出すことが大切だと思います。

9歳のときに脊髄腫瘍により車いすに。2008年北京パラリンピックシングルス金メダル。2009年4月、日本人では初となるプロ転向を宣言。8月、ユニクロと所属契約を締結

